

# 第5回 国際森林年 国内委員会の概要



国際森林年国内委員会は、1月11日に岩手県住田町で、国内委員9名出席の下、第5回委員会を開催しました。

国際森林年国内委員会は、一昨年12月から昨年まで4回にわたり会合を開催し、森林・林業・木材産業の再生、持続可能な森林経営の意義の普及啓発、東日本大震災の復旧・復興に向けた森林・林業・木材産業の重要性などが話し合われました。昨年10月の第4回委員会では、これらの議論を踏まえ「森のチカラで、日本を元気に。」という国民へのメッセージとあわせ、行動提案を取りまとめられ公表されたところ。

今回の委員会は、「2011国際森林年」の活動総括として開催され、各団体が行ってきた活動が報告されるとともに、国際森林年を契機とした今後の取組について話し合われました。

開催地には、東日本大震災の復旧・復興に取り組み、また、森林資源を活用した新しい取組が積極的に展開されている東北が選ばれ、それらの取組を見学するエクスカーションも同時に開催されました。

委員会に先立ち、オブザーバーとして開催県の達増拓也岩手県

知事と開催地会場の町長で国内委員も務める多田欣一住田町長が挨拶。委員会では、第4回委員会の「メッセージ及び行動提案」についての議論に対する報告、5つの団体からの活動報告、林野庁からの活動報告に引き続き、各委員による意見交換が行われました。

委員からは  
・循環利用を進める制度には課題がある。再生産を前提とした取組が必要。  
・森林年を契機に市民と森林との距離が近くなった反面、林業の現状は落ち込んだままである。このような現状を広く認識してもらうべき。

・民間企業の関心が、CSR(社会貢献)からCSV(公益と企業益を両立する活動)に急速に切り替わりつつある。民間とのつながり方をどうするのか、戦略的にCSVへの意欲を引き出せるような事業を進めるべき。  
・森に関する子どもへの教育が非常に重要。





遠野市土淵町 馬搬作業地見学

・初心に戻って、人工林を使って  
も木はなくなるならない等の情報を  
発信していくべき。  
などの意見が出されました。  
最後に佐々木座長から「今後の  
課題について認識を新たにでき  
た。委員それぞれ『森のチカラ  
で、日本を元気に。』というメッ  
セージにより活動頂きたい。また、  
いつか集まって話をしたいと提  
案もあったが将来の課題とした  
い。これまで5回にわたる国内委  
員会への協力に対し感謝します。」  
との言葉で締めくくられました。  
委員会前日に開催されたエクス



遠野地域木材総合供給モデル基地見学、意見交換会

カーションでは、遠野市内で、古  
くから林業の現場で貴重な搬出手  
段となっていた馬搬(地駄曳き)技  
術の実技を見学。  
『原木や製材品に付加価値を付  
け、地域の林業を活性化させよう』  
と地域内の川上から川下までの11  
事業者が団地に集結した「遠野地  
域木材総合供給モデル基地」では、  
流通システムを見学しました。そ  
の後、遠野市森林総合センターに  
おいて遠野市長も同席の下、遠野  
市の林業について意見交換会を開  
催しました。  
また、委員会当日の午前中には  
東日本大震災被災者のための木造  
仮設住宅を見学。遠野市では、地  
元産の木材と集成材を使った住宅  
を、住田町では震災直後にいち早

### 「プロ野球の森」カーボン・オフセット協定 調印式

日本野球機構(NPB)と住田町、国際森林年国内委員の坂本龍一氏が代表を務める一般社団法人 more Trees (モア・トゥリーズ)、国土緑化推進機構が、プロ野球の夜間の試合時間3時間を超えた場合に照明などで排出されるCO<sub>2</sub>を相殺する、「プロ野球の森」カーボン・オフセット協定を締結しました。

その調印式が、1月11日、第5回国際森林年国内委員会の開催会場である岩手県住田町で行われました。



「プロ野球の森」協定調印式



遠野市仮設住宅 希望の郷「絆」



(左)住田町仮設住宅中上団地、(右)同仮設住宅内部

く地元の木材を使って建設をす  
めた住宅を見学しました。  
その後、住田町において造林か  
ら町営住宅までを結ぶ一貫したシ



住田町木工団地見学

ステムが確立された木材加工団地  
を見学し、多田住田町長から地元  
産材の新たな活用方法等につき熱  
心な報告を受けました。